



## 「聖徳太子と加古川」

新年となりました。本年も加古川北高校同様、「ぶらり加古川」もよろしくお願ひします。

今回は、加古川と縁が深い「聖徳太子」について訪ねます。

現在の高校日本史の教科書では、「聖徳太子」という人物名を使わないことをご存知でしょうか。ある教科書では「厩戸王」（聖徳太子）や伝聖徳太子という使われ方をしています。

その聖徳太子といわれる人物にまつわることが加古川には多く残されています。

加古川大堰の近くの加古川河川敷に「太子岩」といわれる岩があります。

飛鳥の朝廷の時代（6世紀後半～7世紀前半）に、加古川左岸下流域一帯は、聖徳太子の講法華経料田が設けられました。料田の水利を進めるために、聖徳太子は落差を

考えて、この太子岩を基準と定め、その上流に井堰を設け、鶴林寺三重の塔を目標に下流へ井溝を掘り進めました。これによって多くの田畑が養われ、豊かな五箇の郷が形成されることになったといわれています。この水利系を五箇井（加古庄、岸南の庄、長田の庄、今福の庄、北条郷の4庄1郷）と呼び、後にこの五箇井を利用して播磨町の新井へも引かれます。



「鶴林寺」の創建は、聖徳太子といわれています。本堂横に立地しているのは、太子堂です。兵庫県下最古の木造建築物（天永3年（1112）建立）といわれています。太子堂の中には、赤外線による調査で発見された涅槃図や太子像が安置されています。新しく

造られた宝物館に、当時の色を復元した涅槃図が展示されています。

聖徳太子を聖人化する「太子信仰」があります。

8世紀の『日本書紀』に、太子を聖人化する記事がでてきます。室町時代の終わり頃、太子の忌日といわれる2月22日に講が開かれ、法隆寺建立などの影響からか、大工や木工職の間で毎月22日に開かれるようになったといわれています。

現在でも、22日に大工道具や植木市が開かれています。

